



視点

「生命（いのち）の安全教育」と 楽しい時間の共有 ～本校の取り組み紹介～

「生命（いのち）の安全教育」は、子どもたちが性暴力の加害者・被害者・傍観者にならないために推進されている教育ですが、2023年4月の本格実施から2年が経過しました。本会報を手にする皆さんにはすでに認知されているかと思いますが、一般的な認知度や実施率は、まだ十分とは言えないのが現状です。本校（公立小学校）では、この「生命の安全教育」に関連し、少しユニークな取り組みを行っています。

取り組みの背景と目的

この取り組みのきっかけは、「子どもたちへの教育だけでよいのか？」という疑問からでした。もちろん、子ども自身が学ぶことは大切です。しかし、単なる「性犯罪・性暴力対策」としての指導にとどまらず、日常的に人権を大切にする関わりこそが重要ではないかと考えました。そこで本校では、「子どもと大人が楽しい時間を共有すること」をベースとしたアプローチとして、月1回の教員による読み聞かせを導入しました。

「つかっと よみきかせ」の概要

- ・担任に限らず、管理職、専科教員、事務職員、教育実習生などさまざまな大人が参加
- ・読み聞かせの絵本は自由に選択（読み手がチョイス）
- ・名称は子どもたちから募集し、学校名にちなんで「つかっと よみきかせ」に決定
- ・オープニング曲を設定し、「はじまり、はじまり～」の定番フレーズでスタート

このように、大人と子どもが自然にふれあいながら、安心感や信頼感を育む場としての読み聞かせが定着してきました。

実施2年目のアンケート結果（教職員15名回答）

- ①目的の達成度〈楽しい時間の共有を通じて、自分や相手を大切にする気持ちや信頼感を育む〉
- ・十分に達成された：46.7%
 - ・ある程度達成された：53.3%
 - ・あまり達成できなかった／達成されなかった・0%
- 〈理由（一部抜粋）〉
- ・継続することで、「楽しみにする子どもが増えていく」と実感できるようになった
 - ・先生への信頼感が深まるきっかけにもなっている
 - ・子どもたちの自然な「聴く姿勢」が育まれ、穏やかな雰囲気が生まれている

②子どもたちに見られた変化（複数回答可）

- ・読書への興味が高まった：80%（12名）
- ・話をじっくり聞く姿勢が身に付いた：53.3%（8名）
- ・クラスの雰囲気が良くなった：40%（6名）
- ・感想を言葉にする力が伸びた：26.7%（4名）
- ・子ども同士での読み聞かせが見られた：6.7%（1名）

③教員自身に見られた変化（複数回答可）

- ・読み聞かせの楽しさを実感：86.7%（13名）
- ・児童の反応から新たな発見があった：66.7%（10名）
- ・子どもとの信頼関係が深まった：33.3%（5名）
- ・他学年の児童から名前を呼んでももらえるようになった：6.7%

④来年度も続けるべきか？

- ・ノリノリのイエス！：93.3%（14名）
- ・ひかえめにマル：6.7%（1名）
- ・あまり気が乗らない／本音を言うとキツイ：0%

今後の展望

本校の取り組みは、「生命の安全教育」を単なる知識の伝達にとどめず、人と人との関わりの中で、信頼感や安心感を育むことを目的としています。「性暴力防止＝規範を押し付ける教育」ではなく、「自分と他者を大切にする心を育む教育」へ。その一歩としての「つかっと よみきかせ」。これからも、子どもと大人が楽しくつながれる時間を大切にしていきます。他にも紹介したい実践がありますが、それはまたどこかで！

こちらの二次元コードから、各クラスでどんな絵本が読まれたか本の表紙をご覧ください。画面に表示される「自動」の部分をクリックすると、スライドショーの表示間隔を変更できます。どうぞご覧ください。（視聴期限：5月31日まで）



篠原 美香
（公立小学校養護教諭・さきたまサークル代表）

～障がいがあってもなくてもつけたい力はみな同じ～」

講師：東みすゑさん（障がい児・者の「性」を学ぶ会《ゆいの会》代表）
（ふくいサークル代表 障害児・者サークル世話人）

日時：2025年2月15日（土）13：30～16：00

会場：佐久平交流センター（佐久市）

参加者：35名（会場20名・オンライン15名）

＜はじめに＞

長野サークル例会は今回で187回となります。田村綾乃代表からは「トランプ大統領は『人の性別は男と女の2つしかない』と発言しました。しかし、多様性を大事に、誰もが豊かな人生を歩んでいくために、ひとりとしてとりこぼさない。誰にも公平に届く性教育をと、活動してきたわたし達に変わりはありません」という力強いあいさつがありました。

＜からだの権利教育＞

今回の講演は、福井から＜ゆいの会＞代表の東みすゑさんをお迎えしてお話しをお聞きしました。問題行動は発達要求の現れ！適切な性行動が取れるような学びが必要であり＜障害者権利条約23条＞に関わって、国連の総括所見では国に対して「しっかりと包括的性教育をなささい！」と、勧告されているということでした。さいころゲームは長野でも実践が進んでいますが、「ふれ合うっていいな、気持ちいいな」という“快”の体験と、「ごめんね。今は嫌かな」という「NO」が言える……相反する二つのことを学ぶ優れた実践だなあと感じています。自分で決められる力、自己決定力をつけていくことが自己肯定感を育む「からだの権利教育」であり、子ども達が「こころとからだの主人公になる」ことだと学びました。

＜自立に向かう思春期＞

退職後もキャラバン隊として学校に出向いて授業をしているひとりとして思春期危機については強い共感を覚えました。中学校でも二次性徴を学ぶ最後の機会として、男子の勃起や射精、女子の排卵や月経について科学的に学ぶ必要を感じます。また、東さんは「人目のある所でセルフプレジャーを始めたら、場所の移動や隠してあげることを優先して行為を止めない。射精できることが大切で、セルフプレジャーの確立は性的自立の第一歩で、性の権利です」と言われました。思春期の性的欲求を、自立に向か

う大切なこととして受け止めてくれる大人の存在は大きいと感じました。

＜参加者の感想＞

- ・さいころゲームやホットタオル、フォークダンス、手のマッサージ等ふれあいを通して“快”を体験していく実践をたくさん学ぶことができ、大変参考になりました。小学校でもやってみたいなあと思いました。
- ・エプロン教材が温かさがあるのにととても分かりやすく、排尿の仕方の方とかペニスの皮のむきかた、一年生にはイラストと言葉の説明だけだと伝わらないな一と思っていたのです。
- ・ふれあいが性の発達には欠かせないということ、禁止や否定はダメと言うこと、セルフプレジャーは権利であるということ……障害を持っていてもいなくても学びは同じ、むしろ基本はここにあると改めて気づかされます。

＜おわりに＞

東さんが30年余にわたる学びや実践の中で身につけて来られた人権感覚、セクシュアリティが子どもたちと向き合う温かい眼差しや言葉の中に凝縮されていました。参加者は、頂いたアイデアと明日からのやりたい気持ちをお土産に、会場を後にしました。

（文責：長野サークル 小林美穂子）



長野サークル第187回例会講師 東みすゑさん

障害児・者サークル第30回セミナー報告

シンポジスト：山中冴子さん（全国障害者問題研究会埼玉支部長 埼玉大学教員）
堀川修平さん（性教協幹事）

日時：2025年2月16日（日）

会場：立正大学品川キャンパス・ハイブリッド開催

参加者：102名

性教協障害児・者サークルの全国セミナーは、今年で30回目を迎え、2月16日（日）立正大学品川キャンパスでの開催となりました。東京での開催は5年ぶりです。5年前を振り返ると、コロナが広がり始め危うい中、悩みながらも対面での開催とし、マスク、消毒などをかなり大掛かりに準備したことを思い出します。今回は30回目という大きな節目でもあるので、その歴史を振り返りながらサークルが大事にしてきた「人権」「人間関係づくり」の学びあいを再確認し合える機会になるよう、実行委員及びサークル世話人で準備をし、当日を迎えました。学びの出会いとなるセミナーは対面でのやり取りを大事にしたいところですが、より多くの方に届けたいという思いから、午前中の全体会のみオンラインも準備しました。

【司会の楽しい会話から始まった全体会】

全体会は、主催者挨拶を兼ね児嶋芳郎さんから「障害児・30年の歩みと現状・課題」が語られました。短い時間でしたが、この激動ともいえる30年の歴史をわかりやすく振り返ることができ、シンポジウムにつながっていきました。この日のシンポジストは、全障研（全国障害者問題研究会）埼玉支部長であり埼玉大学で教員をしておられる山中冴子さんと、性教協幹事でもあり埼玉大をはじめいくつもの大学で教員をしている堀川修平さんです。テーマは「人間発達の権利として『包括的性教育』とは～豊かな人間関係って？包括的性教育の意味・理解を深めよう～」です。難しいテーマではありますが、前もってお二人に時間を作っていただき打ち合わせをする中で、積極的に意見交流ができ、私自身学びになりました。

最初に、山中冴子さんから「発達保障」の意味について、歴史も踏まえお話がありました。「発達」とは、子ども（人間）が外界にはたらきかけ、そこで起こった変化や創造した事実を取り込み、さまざまな機能、能力、人間的な感情を獲得し、自己を形成していく過程であること、発達の主体は子どもであり、教育を受ける権利や医療、社会保障、労働、参政など諸権利を統一して保障すること、保障されるべきは「全面発達」であることなどです。発達の「タテ」と「ヨコ」のとりえ方のお話は、子どもを

豊かにとらえることが人間関係を豊かにしていくことにつながると改めて考えることが出来たように思います。私が障害児教育に出合ったときに、若い教員たちが集まっては、『この子らを世の光に』（糸賀一雄著）を読み合わせ、その日の子どもの姿をどう受け止めるのか話し合っていた日々を思い出しました。子どもから学ぶ姿勢を、繰り返し求められていることを確認し合うことが出来、その後の自分の教員人生の基本になったと思っています。

続いて堀川修平さんからは、戦後日本の性教育の歴史が語られ、歴史を振り返りながら、その中で「多様性」のとりえ方の変化があること、また、包括的性教育の学びは、生まれてから亡くなるまで、くり返し学び深めていくことの大切さをお話いただきました。堀川さんの著書『気づく 立ち上がる 育てる—日本の性教育史におけるクィアペダゴジー』に詳しく書かれていますが、性教協で取り組まれた「同性愛プロジェクト」のとりくみから「同性愛者を問うのではなく、同性愛者を差別している異性愛者を問う教育実践の検討を」という提起がなされました。「普通って何？」、ある意味山中さんのお話につながり、人間が一生を通じて問いかけ学び続けることの大事さが伝わってきました。また、自分に向けてだけでなく社会を問い直し続けていくことの重要さも、伝わってきました。「全障研」と「性教協」、二つの大きな教育研究団体が学び続け伝えてきた歴史が伝わる貴重なお話だったと思います。

次に会場からの質問とのやり取りです。「ママ友の集まりで、性のことを話してもわかってもらえない。どう話せばいいのかな？」「若い友だちの中でも性の話は避けられてしまう。みんなに伝えたいのに」といった困りごとに対し、お二人はすぐに答えを出すとかではなく一緒に悩んでくださりながら丁寧にやり取りをしていただきました。質問して下さった方々も「関係性を絶たないで、でも少しでも伝えられれば・・・いいかな」と最後には笑顔。私には、このやり取りが人間関係づくりにつながる場面に思えました。お二人のシンポジストさん、本当にありがとうございました！

最後に障害当事者の青年二人が登場。みんなに聞いてほしいこととして「スーパーに勤めて20年を超えたけど、勝手に仕事も変えられてしまい年々大

変になってきている」「結婚したい気持ちがあるけれど、出会いがなかなかない。障害がある人たちのお見合いとかも考えてほしい」との訴えがありました。

【話したいことがてんこ盛りの分科会】

午後は3つの分科会が用意されました。

第1分科会は「性教育実践から学びあおう」―障害児学級の教員による実践紹介をもとに話し合いました。頑張って準備した授業より、子どもたちが興味を示して参加した授業のほうが教員としての幸せ感が大きかったこと。情緒障害、愛着障害、発達障害、イライラしやすい、乱暴、暴言、暴力、家庭支援、貧困など、今は子どもたちを取り巻く背景が変わってきている中で「教える授業」から「語り合いの授業」へと変わっていったこと。「何を言っても大丈夫」「失敗しても良い」学級にすることで、何を話しても大丈夫という安心感、対話の土壌が根付いていったなどの報告。参加者からも、様々な悩みや意見が出され、一人一人が持っている権利のことも確認されました。

第2分科会は「生活の中で『性の学び』を考えよう」―放課後デイサービス、寄宿舍、作業所、相談・支援員さんなどが参加。生活支援をなさっている二人の方から報告があり「自分づくり」には自分のからだを理解することが大事、人生の主体者として生きるうえで性教育は必要。また、生きにくさを抱えた方たちとの時間をかけたかわりなどが報告され「不妊手術のことは学校でも学んでおく必要があるのではないか」との提起もありました。参加者たちの時間をかけ青年たちに寄り添いつつ、要求実現にむけた運動をともに創っていく活動報告から、学びと運動を合わせて創っていく大切さを学びあいました。

第3分科会は「障害のある青年たちと語り合い交流し合おう」。4つのグループに分かれて青年たち、支援者、家族が混ざって交流しました。

- ①「恋愛・結婚」―主に、悩みであり、これは実らせるための悩みである。見た目より、中身を見てほしいと思う。距離感のとり方は「うで1本分」と教えられることがあるが、これが原因で会社に行けずクビになった例がある。
- ②「家族・暮らし」―家族の話をした。きょうだいとの付き合い方は難しい。様々な家族構成がありそれによって悩みも違った。家族から離れグループホームに入り1人で住んでいる人も多い。家族の病気も心配。年をとるにつれて、家族といふ考えが変わることに気づいた。
- ③「仕事・学校」―職場で話せる人、横のつながり

がないと感じる。話せる仲間が欲しいという思いを持つのは当たり前。仕事は複数の職場で1日4時間清掃している。4月からは5〜6時間働けるようになる。仕事は楽しいけれど、清掃で使う洗剤が合わなくて手荒れがひどい。女性スタッフは優しいけれど、男性スタッフはパワハラだと思う。「健常者じゃないの?」と言ってきた人もいた。

- ④「趣味／将来・健康」―趣味の話、ゲーム、推しごと、旅行、オリーブオイルの味見などが出た。同じ趣味の人とコミュニケーションでつながりがほしい人も、共有したくない人もいる。好きなことにはお金がかかるし、好きじゃなくなってもルーティン化してやめられないこともある。健康の話題としては、睡眠、ごはんはメンタルケアと関係があると感じる。落ち込んでいると寝られなかったり、食べられなかったり、お風呂に入りたくなかったりする。

いずれの分科会も、時間が足りないとの声が聞こえてきています。しかし、交流することをくりかえす中で、包括的性教育の奥深さに触れること、一人一人の違いを認め合う力が進んできているのも事実です。これからも意見交換すること交流することを大事にしながら「歩み」を続けていければと思っています。

【会場は手作り感いっぱい】

全体会場には、30年という歴史を振り返る展示、教材紹介の展示、絵画（「包括的性教育推進法の制定をめざすネットワーク」でイラストを提供していただいている「GAHAKU」さん）展示と、手作り感がいっぱいでした。もちろん書籍販売もお願いしました。今回は、障害のある方たちにも朝（開始一時間前集合）からお手伝いをいただき、配布資料の袋入れ、机や椅子の並び替え、受付をはじめとした会場づくりなど力を貸していただき本当に助かりました。また分科会終了後も、力をあわせ一気に片付けをし、みんなで力を合わせ手作り感のある、何より自由な雰囲気です話し合い学びあえたセミナーになりました。

（文責：障害児・者サークル 日暮かをる）



シンポジストのお二人

第17回中国ブロックセミナー・第29回島根セミナー ～今を生きる子どもたちに豊かな「性と生」を～

日時：2025年2月16日（日）9：30～16：00

会場：島根県民会館

開催方法：ハイブリッド

参加者：42名（会場37名／オンライン5名）

<午前の部>

午前中は、まつえサークルの伊藤愛さんが「安心できるつながりって？～デートDV～」と題した模擬授業を行いました。参加者には中学3年生になったつもりで参加してもらい、授業はまず、事前に生徒にとって「暴力ってなに？」のアンケート結果を提示することから始まりました。これら様々な暴力には相手があることをおさえ、「暴力がある関係って良い関係と言える？」と問い、この授業のねらいとなる「より良い関係をつくるために何が大切か考えよう」につなげました。デートDVの話と聞いて、恋愛経験がない生徒は自分には関係ないと思ったかもしれませんが、この導入により、身近に起こる暴力の話ととらえ、恋愛に限らず友人、親子関係などにあてはめて考えることができてよいと好評でした。

次に、身体的暴力、精神的暴力、経済的暴力、性的暴力の4枚のイラストを一枚ずつ出しながら、「つきあっている2人の絵です。どんな場面だと思う？」と参加者に聞いていきます。そしてグループごとに一枚選んでホワイトボードにDVをされている側の気持ちと、している側の気持ちをそれぞれに書き出していきます。グループごとに、関係性を様々に想像しホワイトボードいっぱいに気持ちを書き出しました。例えば被害者心理として「初めて暴力を受ける場面では『やめて』『こわい』『どうして？』と感じるだろうが、くり返される場面では『抵抗しても無駄』『自分が悪いから』など変わる」とか、加害者心理としては「好きだから支配していい」「つきあっているんだからあたりまえ」「言わなくてもわかって」など。

伊藤さんが特徴的なものやキーワードなどをとりあげ、相手の気持ちを聴くこと（同意）や自分の思い込み、「あたりまえ」を疑う気づきなどの大切さを共有しました。

そして、イラストのような状況にならないように、対等な関係性をつくるには何が大切かを、グループで話し合いました。参加者の発表では、お互いに思いやることが大事、言葉で伝える、相手の気持ちを聴く、自分の気持ちを知り大事にする、二人だけの世界にならないように誰かに相談する、我慢しない

で「いや」と言ってもいい、価値観を押し付けない、「助けて」が言える環境をつくることなどの意見が多くありました。これらは、実際の中学生の感想にも書かれています。

授業後は付箋紙に①疑問点やみんなで話し合いたいこと、②授業のよかった点を書いて意見交換しました。相談できる環境作りはどうしたらいいか、という疑問に対して、伊藤さんや会場の教員から「普段から雑談をするなど話しやすい雰囲気づくりの大切さ」が語られ共感の声が集まりました。またイラスト教材には、「されている側としている側の気持ちを想像する時、経験したことがない生徒はわからないのでは？」という意見があり、福岡県が作成した動画の紹介などがありました。

また、対等な関係性をつくるために何ができるかを考えるグループワークは、担当したイラストについて具体策を出した方がより深まっていいのではという意見がありました。

また、「暴力を愛だと思い込んでいる関係性が成り立っている場合、この授業を受けても他人ごとになってしまう。我が事にするにはどうすれば？」という疑問もありました。たしかに当事者が気づくことは簡単なことではありません。だからこそ、当事者の周辺の人、地域社会の「暴力を許さない」という意思表示、環境づくりが重要だと思います。この授業は、されている側、している側だけでなく、その周辺にいる人たちができることがたくさんあるよと、気づかせ力づける授業だと思います。まさに被害者にも加害者にも傍観者にもならないための有効な予防教育だと感じました。

（文責：島根まつえサークル 成瀬明子）



被害者にも加害者にも傍観者にもならないための有効な予防教育としての性と生の授業でした。

〈午後の部〉

「からだっていいな」～幼児期から学ぶからだの権利～
授業者 藤田優子さん

◎5歳児になって「からだの権利」を学ぶ 〈授業の流れ〉

①手袋人形を使って、からだのいろいろな場所の名前を確認し合う

- ・「性器」という名前も知る
- ・自分のからだはどこでも自分だけが見たり触ったりできること、性器は人に見せたり触らせたりしないことを押さえる

②感じ方は人それぞれということを知る

- ・こちょこちょが楽しい人もいれば、いやだと感じる人もいる
- ・感じ方は人それぞれだから、「～してもいい？」と初めに聞くことが大切
- ・いやな時は「いや」と言ってもいいし、そう言われたらやめることも大切 ということを伝える

〈感想から〉

- 友だちにでも大人にでも自分の気持ちを伝えるには信頼関係作りが大切だと思う。
みんなと一緒にこういう学びを重ねていく中で、人の思いに耳を傾けたり、自分の気持ちが素直に言える集団に育っていくんだろうなと感じた。
- 5歳児になって授業を受けながらこれこそ「いのちの授業だ」と感じた。
大人も子どもも小さいころから性教育を受けることの大切さを実感した。
- 幼児期にきちんと知り、きちんと学ぶことで、自分について深く理解することにつながると思った。
子どもとともに保護者も巻き込んで学びを広げていけたらいいなと思った。

◎大人として子どもの疑問に答えてみよう

〈活動の流れ〉

①子どもの疑問や困った行動にどう答えるか対応するかグループで一つ選んで話し合う

- ・「赤ちゃんはどこから生まれるの」
- ・「なんで女の子にはおちんちんがないの」
- ・「好きな子ができた キスしたいけど…」
- ・「どうして赤ちゃんができるの」
- ・「パンツを下げて友だちにペニスを見せている子に」
- ・「保育士のからだをさわる子に」
- ・「風呂上りに裸で走り回る子に」

②グループごとの発表を聞き、コメントし合う

〈グループの発表や感想から〉

- 子どもから投げかけられる疑問や気になる行動が見られた時こそチャンス
自分は絵本を使って話したよ。

- うそを教えない 正しく答える。
そうすることで「この人になら安心して聞ける」という信頼関係ができていく。
- いきなり叱ったり指導したりするのではなく、「どうしてそう思ったの？」と聞く。
子どもの声にしっかり耳を傾ける大人の姿勢が大事。
- 子どもにも大人にも「からだの権利」があるんだということをいつも頭の隅に置いて、「わたしはこう感じたよ」とメッセージで伝える。
また、尋ねてくれたことを成長と感じて、その問いに真摯に受け答えしていきたい。

〈午後の活動の感想から〉

- グループワーク中心の会は大変有意義だと感じた。
自分なら…と考え、それを言葉にしてグループで話し合うことで、参考になることをたくさん教わった。
参加型の会はとても楽しかった。
- 学校関係の方だけでなくいろんな立場の方と話ができて、視野が広がった。
- 人権感覚をちゃんと持っていないといけないなあという気持ちになった。
参加者の方々の熱意が伝わり、「共に学ぶ」ことの大切さを再確認した。
- 性教育をしたくてもどう伝えていけばいいのか一人で悩んで終わっていたので、これからサークルでたくさん学んで実践していきたい。
(セミナーの後、さっそくサークルに仲間入りしてくれました)

セミナー全体を通して、子どもの授業スタイルを味わうことでおとなの気づきにつながり、セミナー参加の満足度を上げていくことができた。2月24日には中国ブロックオンライン会議を開催し、ブロックセミナーについて振り返り「サークルの個性を生かした集いの意義」「開催することを引き受けることで高まるやる気」「近隣で生きている仲間との交流の効果」等々…今後のセミナーの持ち方について確認した。

(文責：島根まつえサークル 野津陽子)



子どもの授業スタイルを味わうことがおとなの気づきに繋がってセミナー参加の満足度がアップ！

包括的性教育推進法の制定をめざすネットワーク 第4回学習会 「日本における1990年代以降のジェンダー政策の変遷をたどり、 今後の展望を探る」

講師：井上恵美子さん（フェリス女学院大学）
日時：2025年2月22日（土）19：00～21：00
開催方法：Zoomによるオンライン配信
参加者：48名

包括的性教育推進法の制定を進めるにあたって、日本のジェンダー政策の歴史を振り返る必要があるということで、2月22日、リモートにより井上恵美子さんを講師にお招きして、有意義な学習会が行われました。参加者は48名でした。

日本は日清戦争・日露戦争の頃から、女性は「良妻賢母」という「人」ではなく妻・母役割のみを期待されながら、「家」を通して「国家」に貢献する自覚を女性に持たせる教育をされてきました。

そして「伝統的な家族」を大切にし、特に戦時下では「女」は「男」を支え、「男」はお国のために戦い死をもいとわない、強い国作りを目指してきました。現在に至るまでの「国家（社会）」と「家」と「個人（女性）」の関係の変化、固定的性別役割分業観（男らしさ、女らしさ）の扱いの変遷を分かりやすく説明していただきました。

CEDAW（国連・女性差別撤廃委員会）から日本政府に懸念が示されながらも「男」と「女」という固定的な二元論を固持し、性の多様性を認めない、選択的夫婦別姓制度が進まない、少子化に対する女性への多数の差別発言、そして性教育へのバッシング。この日本のジェンダー政策の変遷をたどることで、見えてくるものがたくさんありました。

「ライフスタイルの自由な選択」の結果について、自己責任、自分の問題に帰してしまう新自由主義的発想ではなく、各自が自己選択したら、どの選択肢を選んでもそれを保障する社会制度を充実させることで誰もが幸福になれる社会にすること、性教育を核とする人権教育を位置づけ、それを推進するのが包括的性教育推進法という人権法制を構築する必要があると井上さんは訴えていました。

「国民は国のためにある」のではなく、「国は国民のためにある」べきということを再考できた学習会でした。

（文責：幹事 樋上典子）



講師の井上恵美子さん

お知らせ

「包括的性教育推進法制定をめざすネットワーク」連続講座 「聞いて聞いて 私の実践！ ～学校における包括的性教育～」

これまで「包括的性教育推進法制定をめざすネットワーク」では、日本と諸外国の包括的性教育を支える法制度について学ぶ講座を開催し、諸外国の制度整備の動きへの認識を広めてきました。しかし、具体的な実践内容への関心も高まり、日本における実践が十分に知られていないことが課題となっています。そこで、新たに「連続講座」を企画し、特に学校教育に焦点を当て、幼稚園から高校、特別支援学級の実践例を紹介します。5名の実践を共有しながら、みなさんと学びを深めたいと思います。

第1回	4月19日	堀川修平さん	連続講座初回オリエンテーション！ 包括的性教育ってなにを大切にしているの？（※この回のみ配信）
第2回	4月26日	岩月達郎さん	幼児期の性教育の取り組み
第3回	6月28日	星野 恵さん	“自分のからだのことを自分で決める力”をつけるために必要なこと
第4回	8月30日	石田智子さん	私の恋愛観を語ろう
第5回	9月（調整中）	谷村久美子さん	高校生と考える「人間の性と生」の授業
第6回	10月11日	桜井佳子さん	性と生の学習「うまれるよ いのち」



詳細はQRコード参照

「男子ってなんでそうなの？」から考える ～学校の男性性とジェンダー・セクシュアリティ平等～

共催：『季刊セクシュアリティ』編集委員＆『教育』編集委員
日時：2025年2月24日（月）14：00～16：30
開催方法：オンライン開催・オンデマンド配信
参加者：申し込み353名・当日参加155名

「セクシュアリティ・ジェンダー・性教育のいわば専門店の『季刊セクシュアリティ』と教育学の諸領域をあつかういわば百貨店の『教育』が、ともに2024年10月発売号で、偶然にも「男性性」をテーマにしたこと。その問題意識を共有し、考えを深めていきましょう！」と、教育科学研究会委員長の片岡洋子さんの挨拶でスタートしたコラボイベントの報告をします。

★『季刊セクシュアリティ』副編集長・性教協幹事

渡辺大輔さん

今回の特集「男子ってなんでそうなの？どうしたらいいの？」季刊誌118号に載せた「男性と言っても一枚岩ではないんだよ」ということをだした論考と男性教員がどんな思いで実践を重ねてきたのかといった理論と実践の相互作用を重要にした編集についての思いが語られました。

★教育科学研究会『教育』11月号 編集担当

大江未知さん

日本の学校に必要なことは、その構造の中で指導をうまく回すことではなく、学校の「男性性」にちょっと気づいて子どもの人権をとり戻す実践であり、また、学校の男性化の深刻な加速を見えなくしている労働条件の悪化に気づくこと。今回『教育』11月号でその一歩が踏み出せたのではないかと語られました。

何を大切にしながら執筆してきたのか 3人の報告

★男子校でこそ感情の言語化を

（京都）男子中高一貫校社会科非常勤講師

一般社団法人あすには教育研修チームリーダー

田中めぐみさん

中3社会・公民と高2選択講座「男性性研究サークル」の授業実践（NHK『かんさい熱視線』「男社会を考える」で取材された授業）の報告で、以下の5つの点に触れました。

- ①「市長と知事が卒業生」という権力へのアクセスのしやすさ（特権性）
- ②教員としての権力を持つ自分の、一方で女性であるという立場性による葛藤
- ③「生徒が怖い」という表現、発言をした生徒ではなく社会構造を問う視点
- ④自分の被害者性を認める→他者の苦しみに目を向け社会構造に向き合う
- ⑤感情の言語化（自己受容・弱さの自己開示？）

★教室をフェミニズムの視点で眺める

本当に自分の好きな色を選ぶ～ピンクの歴史～

小学校教諭 星野俊樹さん

学校、教室をジェンダー平等にするために、「自分らしさ称揚系」（女の子の翼を折らない、男の子に呪いをかけない）の実践に留まるだけでいいのだろうか？という問題意識をもち、自分たちを苦しめる構造があれば、それを認識して変える主体に子どもたちを育てる教育実践を目指していくべきである。つまり、子ども一人一人が生き生きと動く点を阻害している線がどのように現れるかという知識を教員が持ち、教室の中で起きている性差別に向き合う実践。

星野さんは『教育』には男子の文化に支えられた男子の権力を振るう男の子たちに振り回されたある1年の実践を、『季刊セクシュアリティ』には、運動会の競技を通してピンクがどんなふうにな女の子の色として社会的に作られてきたかを考えた実践を紹介しています。

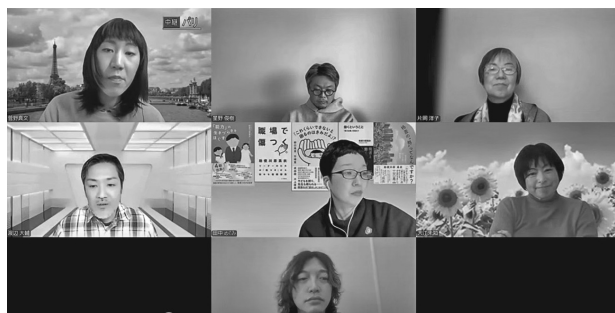
★トラブルとしての異性装

函館市公立高校教員 菅野貴文さん

異性装をして授業することで、生徒や大人に対してどんな影響があるか。つまり、世の中が混乱して騒がれてザワザワしているということを書いたことについて話してくださいました。一番伝えたいのは、社会や構造がおかしいということ。「男性性」という言葉じゃなきゃいけなかったのかという反響があったこと。そして、私を語る際に性自認の話をしなかったのは、自分でもよくわからないからとコメントされました。

最後は、登壇者のクロストークでした。堀川修平さんの進行で、「男性性」という表現を用いたねらいや授業実践後の学校の状況、実践の広がりについてなど語り合いました。

（文責：熊本サークル 松下直子）



登壇されたみなさま

日時：2025年3月2日（日）9：50～15：50

会場：大分県教育会館

開催方法：対面開催

参加者：99名

1. 開会にあたって

今年も性教協大分サークル春のセミナーを開催しました。第23回目は午前中にSOGIサポートチームココカラ！共同代表である大住珊士さんによる講演、午後は県立学校養護教諭の財津聡士さんによる実践報告といった2部構成で実施をしました。

サークル代表の高津仁美さんから開会にあたり、「自分も大分サークルで活動することで、足を運んで実際に人に会って学ぶことを知った。今回たくさんの参加者が学びたいと思って足を運んでいることを嬉しく思う」と今回参加してくださった方々への思いを語られました。

続いて高津さんの恩師であり大分サークル前代表の佐藤益美さんが、東日本大震災の際に歌を送られた時の映像と共に、佐藤益美さんの死後もお墓参りに来られる被災地の方がいたことを話され、人とのつながりの大切さについて改めて伝えられました。実際に顔を合わせて話を聞いたり意見を交わしたりして学ぶことを大切に、23回目までセミナーを開催してきた大分サークルのこれまでの取り組みが伝わる開会の挨拶でした。

2. 講演「セクシュアリティについて考える」

午前は「セクシュアリティについて考える」というテーマで、講師の大住さんに講演していただきました。大住さんは長きに渡り性的マイノリティについての講演活動をされており、大分サークルのメンバーの中には勤務校で講演していただいたことがある人もいます。その人間性に惹かれ、参加者の中には大住さんと縁のある方々がたくさん参加されました。

まず、今なお日本は性別二元制（論）が根強いという現状から、以前は「オネエタレント」と呼ばれメディアへ出ていた方々の例をあげながらセクシュアリティについて話されました。自分自身のセクシュアリティを考える際には、どこか一面だけをみて判断するのではなく、“からだの性”、“こころの性”、“社会的性”、“性的指向”と要素ごとに考えてみてほしい、そして今日の内容で一番覚えてほしいことは“SOGI（E）”という言葉だとありました。大住さんが言われていたように、性別二元制の根強さは私も感じるところです。自分自身、大分サーク

ルで性の多様性について学んでいても、ふとした所で女・男という区別をしていたことに気がつくことがあります。「差別は故意に他者を傷つけるものだと思っているかもしれないが、そもそも誰かを存在しないものとし、無意識に傷つけていることもある」という大住さんの言葉に、はっとした参加者もいるだろうと思いました。講演の中では、調査や名簿について性別を問うたり分けたりする必要性について触れられ、まずはその質問や性別欄に疑問を持つことが第一歩だと感じました。

カミングアウトやアウティング、性別変更や名前を変えるための戸籍変更の要件や実際についてでは、要件の内容などについて具体的な事例を含めて知ることができ、性別変更のハードルの高さを感じるとともにその異様性を感じました。特に印象的だったのが、「性別に対する違和感を除けば除くほど無くなるのはもちろんだが、そこを除いたとしてもやはり周りとの差というものは埋まらない。だからこそ自分の中で本当にしんどいことは何なのか、その手段は本当に必要なのか必要でないのか、自分にできるのかできないのか、を考えてほしい」という言葉です。身体的リスクを伴う手段であるからこそ、よく考えてほしいという大住さんの思いを受け取ると共に、身体的リスクを伴う手段を取るかどうか決断するまで、しんどさを抱えながら生きている方たちがいる現実を改めて感じました。

最後に、昨今SNSなどでトランスジェンダーの方への誹謗中傷や偏見が散見されることに対して、「トランスジェンダーの権利を認めることから外れた部分での問題を、すべてトランスジェンダーの問題としている。問題を一緒にしてはいけない。実際にこれまで問題が起きたことはない」と話されました。知ること・学ぶことが無ければますます誤解や偏見、差別が広まっていく世の中になると思います。大住さんが講演の最後に送られた「人権や違いを知ることが広い世界につながる」というメッセージを、このセミナーの参加者一人ひとりから広めていけると良いと感じました。

質疑応答では、セクシュアリティと宗教の関わり、会議参加率や役職での女性比率が取り上げられることなどの質問がありました。女性比率については、「性別関係なく平等にというわけではなく、現時点で性

別によって不平等が生じているのであればまずはそこを平等にすべきだと思うし、その上で男女の区分を残すことが必要かどうかを判断していけたら良い」と回答され、私自身納得することができました。

3. 実践報告「新人だった私の性教育」

午後は「新人だった私の性教育」というテーマで県立学校養護教諭の財津さんに実践報告をしていたきました。財津さん特有の語り口と楽しいスライドで和やかに始まりました。男性養護教諭はまだ数少ないのですが、全国に96人いて、中でも九州は10人とかかなり多いというお話もありました。その中で、財津さん自身「“男性”養護教諭ではなく“養護教諭”でありたい」という思いも語られ、午前の大住さんによる講演とのつながりを感じました。

続いて、性というものに興味を持ったきっかけに始まり、性＝楽しいものだと感じていた自身の価値観に疑問を持つような出来事との遭遇、そして性教育を始めたきっかけについて赤裸々に語られました。

性教育を何から始めたら良いのだろうという思いに答える形で、財津さんが始めたきっかけについて大きく3つ（①赴任した学校の取組みに乗る②仲間と一緒に③子どもの困りや要望にのる）話していただきました。②では複数配置のペアの養護教諭が子どもたちと性を学ぶ際に掛けていた言葉「自分と相手が幸せになるにはどうしたらいいか考えよう」に感銘を受け、自分が性教育をする上で大切にしていることだと話されました。

実際に財津さんが取り組まれた事例をみても、ペアの先生の言葉が柱の一つになっていると感じる部分が多々ありました。③では、子どもの性教育への保護者が抱える困りに対して、財津さんがその子自身と向き合いながら性教育を進めたことがよくわかりました。

財津さんが当初考えていた学習は説明が多かったようなのですが、ペアの養護教諭からの「つまんない。もっとざっくばらんに話せるようにしたらどう？」という助言から「ざっくばらんに話す」という方法に変えたそうです。その結果、難しい単語を知らなくても「むね」や「おしり」などの簡単な単語を検索画面に入れるといくらでも性的なコンテンツが表示されること、そしてそれらがフィクションとは言えなくなっていた（商業的に販売されているアダルト動画なのか、そうでないのかの区別がつかない）ことを知り、率直に「怖さ」を感じたと話されました。それを聞き、性情報がこれまで以上に氾濫している中で、正しいものを拾い上げることの難しさを改め

て感じました。

最後に財津さんが「性教育は波紋のようだ。誰かの思いや取り組みが波紋のように広がっているのを感じる。だからこそ、まだ経験が浅いと思っている若い方ほど飛び込んでみてほしいし、たくさん経験を積まれたベテランの方はこれまでの取り組みを今後も伝えていってほしい」と話されました。

財津さんの飾らないありのままの実践報告を聞き、自分もやってみようと思ったり、取り組みを他の人にも話してみようという気持ちになったりする人が、たくさん増えるような予感がしました。夏には沖縄で開催される全国夏期セミナーの分科会発表もされます。今回のセミナーを経て、更に財津さんらしさに磨きがかかった楽しい発表になることを期待しました。

実践報告の後は参加者5～6人ほどでグループになりワークを行いました。テーマは①性教育を始めた（始めたい）きっかけ②性教育、始め方のコツ③本日の感想の3つで、どのグループも盛り上がりて話をしていました。グループごとの発表では、様々な職種ならではの意見や取り組みがあり、全員で共有することでより学びが深まりました。

嬉しいことにセミナー閉会后、性教協大分サークルへ加入したいと新たなメンバーが加わりました。学びの輪が広がる瞬間を目のあたりにでき、大盛況の春のセミナーとなりました。開催にあたりご協力いただいた関係各所のみなさま、ありがとうございました。

（文責：大分サークル 大力央弓）



講座1 大住瑠士さん



講座2 財津聡士さん

季刊セクシュアリティ119号読者の集い

日時：2025年3月7日（金）20：00～21：30

開催方法：Zoomによるリモート開催

参加者：13名

読者の集いの内容を紹介する前に、『季刊セクシュアリティ』119号の中味を紹介します。

季刊セクシュアリティ119号 特集 いま、「家族」の意味を問う

特集にあたって 及川英二郎 【総論 座談会】いま、「家族」の意味を問う 中野久恵・良 香織・及川英二郎・村末勇介 【論考】在日朝鮮人にとっての家族と祭祀 李 杏理 【論考】ハンセン病問題と家族 ―日本における患者・回復者とその家族の経験から― 西浦直子 【論考】非行という視点から見た家族とその支援 北村篤司 【実践にむけて】『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』にみる家族 良 香織 【実践にむけて】中学校家庭科の教科書で「家族・家庭生活」はどのように扱われているか 笥 敏子 【インタビュー】福祉からみた学校と家族のいま 草持 好・高橋陽子・聞き手 良 香織・及川英二郎 【コラム】絵本でまなぶ家族 良 香織 【実践】明治時代の「家族」について取り上げた2つの授業 小林優香 【コラム】胎児性水俣病患者にとっての「家族」―「障害者」の生と性― 及川英二郎 【報告】知的障害者への性虐待事件勝利判決の報告 永野佑子（連載は省略しました）

13名の参加者を紹介します。（50音順、敬称略）

上川晶恵（きたみサークル） 熊谷 耕（エイデル研究所） 齋藤麻里（きたみサークル） 敷田佳子（大阪サークル） 中野久恵（編集委員） 松崎聡美（きたみサークル） 野呂航平（広島サークル） 日野上玲子（奈良サークル） 星野 恵（編集委員） 松下由惟（きたみサークル） 水野哲夫（編集長） 村末勇介（編集委員） 渡辺大輔（副編集長）

「読者の集い」の直前2月22日に渡辺大輔さんが「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」講座で訪れた北海道のきたみサークルから4人もの参加者があったことが今回の特徴でした。

読者の集いの内容紹介

1時間半ほどの間に交わされるお話は、文字起こしするとA4判で数10枚に及びます。どうすればお伝えできるのか、いつも悩みます。今回は、お名前は伏せて、私(水野)の印象に残った発言を紹介させていただくという形でお知らせします。

◆「ガイダンス」の解像度が上がった

『「ガイダンス」に見る家族』という良 香織さんが書かれてるところ。良さんがわかりやすく噛み砕いた日本語で書いてくださって、この文章を読んだときには、「あ、なんか入ってくるなー」っていうふうに思っ、て、ちょっと「ガイダンス」の解像度が上がったような気がしました。

◆「家族には法的責任がある」だけでは終わらないことを改めて確認できた

家族について何を教えるのか考えていた時、先輩に

「家族には法的責任があるってことを伝えなきゃダメでしょ」って叱られてしまいました。それにモヤッとしてた時に、単に責任があるということじゃなくて、家族が責任とかを果たせるように、政府だとかそういうところがサポートしなきゃいけないんだよというところを読んで、「やっぱり人権なんだな」ってところがスッと落ちました。

◆家庭科の教科書―検定と削除

笥 敏子さんの記事。家庭科の教科書検定の過程で、教科書会社は採択されなかったらすぐ困るから、指摘されたところをまさに付度して削っている。出来上がったものはどちらかというと道徳的な中身になっている部分が多く多いということ、大切なものがどんどん消えていくことをすごくわかりやすく書いてくださっている。

◆編集の苦勞と得たものの大きさ

編集委員三人で話し合った中で、及川英二郎さんが「特集にあたって」のところの「ミクロの排除とマクロの排除」という図を示してくださっていろいろ話し合いをしてきました。在日の方やハンセン病患者の方や胎児性水俣病とかもいろいろな要素が絡み合っ、て、家族の問題の地下水脈というか、そういうところいろいろ課題があるという方向で構成していこうかなという話し合いをしたことを覚えています。とても勉強になりました。

このほか、国際結婚家族(特に女性が外国人の場合)における男女のヒエラルキーの問題、北海道の農村における三世同居が基本のような家族の中でのジェンダーバイアスのこと、被爆者における体験の語り継ぎとハンセン病におけるそれとの違い、和光幼稚園やおおぞら谷津保育園での実践に学んだこと、編集委員の方がたが、原稿執筆、座談会、原稿依頼、編集作業ととても大変だっただろうということなど、話は多岐に渡りました。次回の読者の集いは5月下旬か6月上旬になる予定です。

（文責：水野哲夫）



「読者の集い」お開きの記念撮影

イベント紹介 お問い合わせは本部03-3379-7561(Fax)又はjimu@seikyokyo.org (Eメール) まで。

第32回石川セミナー

【主催】“人間と性”教育研究協議会石川支部
【テーマ】あなたらしく わたしらしく～それぞれの自立と共生を目指して～
【日時】2025年5月18日(日) 10:00～15:30(受付9:30～)
【会場】石川県女性センター2階大会議室他 金沢市三社町1番44号 JR金沢駅から徒歩15分 Pあり
【内容】午前 分科会
①災害時における性と生 ～ぜひ考えたい課題とは～
②新潟発!「ユースクリニック」ははじめの一步
～街中に中高生と地域の大人がつながる場を～
(北信越ブロック協力分科会)
午後 講演
包括的性教育を考える 沖縄の終わらない“戦争”
～性・人権・平和～
【講師】宮城晴美さん(沖縄女性史研究家)
【参加費】一般:1,500円 性教協石川会員:1,000円 大学生・専門学校生など:700円 高校生以下:無料
*参加費は午前だけ、午後だけまたは1日の方も上記区分で同じ参加費です。
【定員】100名
【開催方法】対面のみ 会場でお待ちしています。
【申し込み方法】下記QRコードで
またFAX 076-244-7828または、参加者名、連絡先を明記のうえ、Eメールseikyokyouishikawa@gmail.com 分科会参加者は①または②を選んで下さい。
同時に振替口座ゆうちょ00700-6-15081へ参加費を送金下さい。
【問い合わせ】“人間と性”教育研究協議会石川支部事務局
〒921-8034 金沢市泉野町4丁目13-16
Eメール seikyokyouishikawa@gmail.com
FAX 076-244-7828 内藤右子

包括性教育推進法の制定をめざすネットワーク 第5回学習会

【テーマ】「包括的性教育に関する日弁連の活動と今後の課題」
【主催者】包括性教育推進法の制定をめざすネットワーク
【日時】2025年5月24日(土) 19:00～21:00
【会場】オンライン配信
【内容】(1) そもそも日弁連とは
(2) 包括的性教育に関するこれまでの日弁連の活動
(3) 学習指導要領改訂とどう向き合うか(問題提起)等についてお話しをしていただきます。
【講師】藤井 豊さん(京都第一法律事務所 弁護士・当ネットワーク共同代表)
【参加費】一般:1,000円 ユース(29歳以下)・学生・障がい者:無料
【定員】100名
【申込方法】peatixから
<https://houkatusei-gakusyu5.peatix.com>
【申込締切】2025年5月23日(金) 15:00
【問い合わせ先】suishinhounet2023@gmail.com

岐阜性教協5月研究例会

【主催】岐阜県人間と性教育研究協議会
【テーマ】障碍を持った青年たちの発表
『ダメダメと言われてきた仲間たち
～障がいのある青年が集うワンチームドリームトライの性教育実践～』
【日時】2025年5月25日(日) 13:40～
【内容】ワンチームドリームトライの若者たちの活動の様子、若者の話、支援者の話
【講師】ワンチームドリームトライの若者&河村あゆみさん、寺部佳代子さん
【開催方法】対面参加のみ
【会場】岐阜市公共施設(岐阜性教協のホームページで確認)
【参加費】岐阜性教協のホームページで確認する。
【定員】なし
【申込方法】岐阜性教協のホームページに申し込む
【申込締切】岐阜性教協のホームページで確認する。
【問い合わせ先】岐阜性教協のホームページもしくはメールにて問い合わせする。

2024～2025年度 第2回乳幼児の性と性教育サークル例会

【主催】“人間と性”教育研究協議会 乳幼児の性と性教育サークル
【テーマ】『今こそ知りたい、子どもをとりまく「暴力」のこと。一世界の性教育のガイドラインや、国内外の絵本にみる「暴力」とは～』
【日時】5月31日(土) 14:00～16:00
【会場】日本丸訓練センター第3会議室(みなとみらい)
【内容】講義
(1) 性暴力に「ゴーサイン(背中を押す)」を出すものを考える
(2) 世界のさまざまなガイドラインに性暴力はどのように書かれているのか
(3) 絵本には性暴力がどのように描かれているか
(4) 性暴力防止のための取り組みが陥りやすいこと
【講師】長 香織さん(宇都宮大学準教授)
【参加費】サークル会員:1,000円 性教協会員:1,200円 一般:1,500円 学生:500円 ※会場、オンライン共通
【定員】会場45名 オンライン100名
【開催方法】ハイブリッド開催
【申込方法】ピーティックス
【申込締切】クレジット 5月30日12時 コンビニ・ATM 5月29日12時
【問い合わせ先】s.and.se.for.children@gmail.com

【お詫び】

3月末発行の会報400号は、記念に色上質紙を使用することにしていましたが、手違いによりいつもの白い紙になってしまいました。お話を聞いて楽しみにしていらっしゃった方には申し訳ありませんでした。

事務局だより

★新年度、転居された方は新住所をお知らせください。 jimu@seikyokyo.org
★基礎講座の申し込みが始まっています。多くの方にお声掛けください。
★性教協の活動をより拡げていくためにも、会費収入は大きな支えとなります。未納の方は早めの入金をお待ちしています。退

会のお申し出がない場合は、自動的に会員継続になります。
*年会費は5,000円(学生は2,000円)です。
*郵便局はATMにて土・日曜日でも送金できます。
【ゆうちょ口座】
口座名:人間と性教育研究協議会 口座番号:00190-4-115187
ゆうちょ以外の銀行からは 当座 0一九(019) 115187 です。

編集後記

4月6日の朝日新聞に、26年度から高校で使われる教科書の内容が紹介されています。保健体育で「性暴力は人権侵害」と記載されているものもあり、「教科書で、性的同意や人権に基づいた性の学びを伝えようとしている」と新聞は伝えています。各地のサークル、ブロックで取り組みを進めていることが、学校教育につながろうとしているのだと、光が見えた気がしました。(北山ひと美)

4月になり新生活が始まった方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。今年度も勤務校で「性と生」の授業を担当することになりました。新1年生と共に今年も学びを深めたいと思います。

(荻野雄飛)